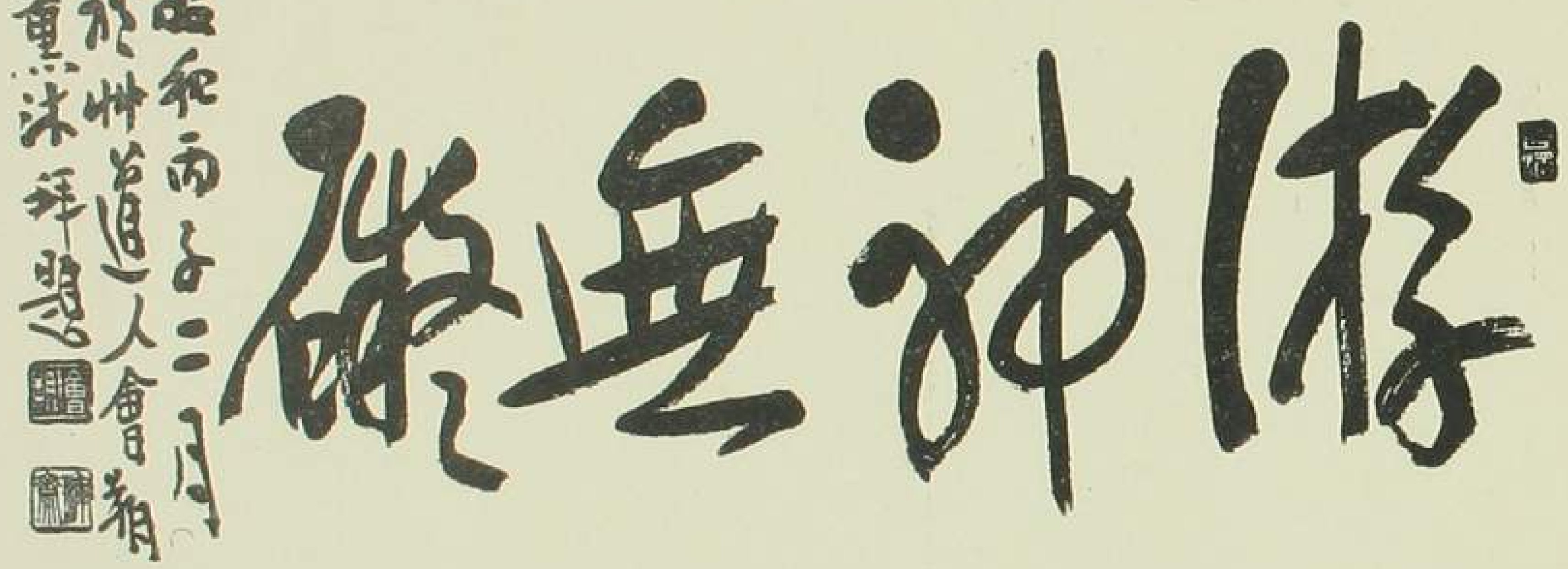
坪內逍遙博士遺墨

任興帖

解說


游神無碍
昭和丙子二月
薫沐拜題

游神無礙

昭和丙子二月
於艸首道人會着
薫沐拜題

はしがき

『任興帖』は坪内逍遙博士の風格を偲ぶに最もふさはしい遺墨集であると信じ、ここに博士の一周忌記念として限定三百部の複製を作り、先づ一部を博士の靈前に供へ、若干部を縁故者に贈り、其の餘を希望者に頒つことゝした。

熱海雙柿舍に在る博士の書齋は、主人を失なつた時、無用の一紙片をも留めぬ程に整頓されてゐたが、机の上に同型の二冊の書畫帖が遺されてゐた。一は『任興帖』他は『放漫帖』と題し、すべて博士の墨蹟である。ともに曾て人に示された事はないが、癸酉歳首或ひは癸酉四月とあるによつて、昭和八年のすさびと推定される。先年博士が、所謂三絶披露をされた時、其の一つに揮毫謝絶を擧げられたのは、委囑に拘束されて興來らざる筆を執る事を嫌はれた故であるが、此の二帖は其の名の如く、不羈奔放の筆を揮はれたもので、專門家の手法を超越して氣韻生動の概がある。複製に際しては、原帖の白紙を省き、『放漫帖』九葉を便宜上『任興帖』十九葉の次に合併し、寸法と色彩とは原態に從ふことにした。

終りに本帖のために題字を寄せられた會津八一博士に謝意を表し、複製の功程について第一書房主長谷川巳之吉氏の協力を感謝する。

昭和十一年二月二十八日

國劇向上會

任興帖解説

一

◎萬殊一理

多種多様の品類も一貫した道理によつて統べられてゐる。眞理は一の意。（出典は蘇東坡の詩）

○癸酉歳旦

昭和八年の歳首

○印章

「意長日月促」 博士の好んで用ひられた句。（十二）參照。
「雙柹舍」（二）參照。
「逍遥」

二

◎雙柹の圖

◎おい柹のいさゝ五百枝のをちかたの、青海原は見れど飽かぬかも。

◎わが軒の痩仁王とも立はゞる、柹のおい木の二もとおもしろ。

◎我なき後の千歳を生きて世のむかし、里の昔をかたれ老柹。

◎柹一顆赤洒々として秋の暮。

◎冬隣裸の柹のをかしさよ。

歌、句ともに雙柹舍庭前の柹の老樹に就いての御自作。博士の熱海を愛されたは久しく、明治十九年以來殆ど毎年のやうに此の地に靜養され、同四十三年には熱海荒宿に別莊を設け、大正九年同町水口に雙柹舍を營まれた。庭前に二百年以上を經た柹樹が二本あつて、これを殊に愛されての命名である。

○印章

「小羊」　博士は未年のお生れだつたので、「逍遙」の音に通はせ、別號として屢〻用ひられた。

三

◎雲奇于畫
水韻于琴

雲の姿は畫よりもおもしろく、水の音は琴にもました妙なる響きを持つてゐる。大自然の美を賞した句。（出典は金玉黄葉）

○印章

「逍遙遊人」

四

◎寒山拾得の圖

◎大海の水に邊りは無きものを、寄り來る魚の千萬が、同じ餌食に打群れて、相食瞰す癡肉團。

博士作の舞踊劇『寒山拾得』の一節で、哲學的暗示に富んでゐる。

○印章

「逍遙」

五

◎天道至則反

天道すなはち宇宙の大道は循環するもので、至り極まれば又もとに反つて、反對の現象を生するの意。（出典は管子）

◎印章

「大我」　我は自在の意。大我は小我に對し、相對の世界を超越した自由境に心を遊ばすの意。

「柹叟」　雙柹舍を營まれてからの別號。

六

◎智者作法而愚者制焉。賢者更禮而不肖者拘焉。　荀子

知識の秀でた先覺者は法度を作成し、一般衆愚はそれによつて統制せられ、賢能の士は新たなる儀禮を作成し、不肖なる愚人はそれに拘泥して束縛される。（出典は荀子）

◎古今不同俗。何古之法。帝王不相襲。何禮之循。　戰國策

古へと今とは時代の進展から風俗習慣を異にするものなので、必ずしも古への法に依る必要はない。聖賢の君は過去の因襲に囚はれないから、固定した禮儀作法を楯に、それのみに依ることはしない。すなはち風俗、習慣、法度、儀禮は、時代と共に人と共に變つてよいものである。（出典は戰國策）

◎聖人制禮樂。不見制禮樂。　淮南子

聖人は時代を洞察して、新たなる禮樂、文物を制定し、過去の形式的禮樂には制御されない。（出典は淮南子）

◎法應時變。禮隨俗化。　遺忘出典

法度、法文は場合によつて變すべきものであり、禮儀、禮文も風俗習慣によつて變化すべきものである。（出典は遺忘出典）

博士は物にこだはることなく、臨機應變、融會無礙であつた、處世にも、學的研究にも、劇の演出にも。これらの句は、さうした博士の心事なり態度なりを表明してゐる。

○印章

「柹叟」

七

◎雙柹舍より相模灣を眺める圖。

◎限りなくかはるがをかし朝な夕な、山いろ〳〵に海いろ〳〵に。

博士は變化のある景色を好まれた。雙柹舍の座敷から、老柹の小枝を通して相模灣を眺めると、朝夕に晴曇につれて、或ひは紺碧に或ひは淡墨に或ひは灰色に、二六時中變化するのを賞された。

○印章

「壺中」は元稹幽棲詩の「壺中ノ天地乾坤ノ外」に由來してゐるが、また坪内の音を通はしてもある。

「柹叟」

八

◎君子上達。小人下達。

君子は常に道德を行ふから、其の人格は向上發達し、德寡き小人は利慾の念に驅られるから、行ひは卑く、人格は益〻墮落する。（出典は論語）

○昭和八年試筆。

○印章

「柹叟」

九

◎眼到。心到。身到。

右　清汪新讀書三則。

眼で見て意義の深處に觸れ、心によく理解して深義を會得し、體驗して實行に及ほす。すなはち眼・心・身の三點に亙つて極める所がないならば、讀書の眞意義は得られない。之を讀書三則とも讀書三到ともいふ。（出典は朱子童蒙須知）

○印章

「不卽不離」この句も博士が屢〻筆にも口にもして愛されたもの。

「逍遙」

「雙柹舍」

一〇

◎有當讀之書。

有當熟讀之書。

有當看之書。

有當再三細看之書。

右　清唐彪讀書賦。

（九）と同樣な讀書法を說いたもの。ただ讀みながしにしただけでよい書と、丁寧に精讀すべき書と、常に注意して懇ろに讀み、決しておろそかにしてはならない書と、また更に十分の關心を以て再三調べ反讀しなければならない書とある。

（出典は唐彪の讀書作文賦。但し原書には「有必當備以資參考之書」の一項を擧げて五等に分けてある。）

○癸酉春日柹叟書

癸酉は昭和八年。

○印章

「小羊」

一一

◎案山子の圖

◎しよんぼり立つやれ案山子、二つ殘りてカラコロリ、鳴子の音に思ひ出の、紅葉もけふは散りぬらん。

博士作の舞踊劇『お夏狂亂』に因んだ圖と共の一節。

○印章

「逍遙」

一二

◎意長日月促　東坡句
世短意常多　淵明句

心に思ふこと、爲さんと欲することは限りもなく多いが、此の世にある日月には限りがあつて短かいの意を寓した句。博士は特に前者を坐右の銘のやうにしてをられた。次の(十三)の歌は同じ意を詠まれたもの。

○印章

「柹叟」

一三

◎人の身のおもひは遠くおゆらくの來る日はちかしせむすべもなき。

◎はてもなく思ひは長しかぎりあるひつじのあゆみしばしとゞめよ。

いづれも前の「意長日月促」の心を詠まれた歌である。

「おゆらく」は「老いらく」に同じ。「ひつじのあゆみ」のひつじは、前にも述べた如く、博士が未年のお生れなので、つまり御自分を指されてゐる。自分の生命には限りがあるが、しばしなりとも日月の流れ歩むのを留めて、少しでも意義のある仕事をしたいとの感懐を述べられたもので、長生きをしたいの意ではない。

一四

◎野草幽花各自春

野にある名もなき草、奥まりたる草むらの花にも春はおとづれて、それぞれ風情ある花を開く。まことに奥ゆかしいことで、決して王侯貴人の庭園に咲く名花ばかりが春を恣にするのではないの意。(出典は蘇東坡)

○印章

「柹叟」

一五

◎西洋の案山子の圖

他の同様の圖には「I Take All」に據つた圖と斷り書きがある。

◎法律を案山子同樣の物にしてはならない、いつまでも同じ格構のまゝで樹てゝおくと、わるい鳥どもがしまひには慣れて、こはがらないで、それをとまり木にしてしまふ。

Shak. M. F. M. A. 29. I.

此の句はシェークスピヤの『メヂュア・フォア・メヂュア』(博士の譯では『以尺報尺』)の第二幕第一場のアンヂェローのせりふである。博士は此の作を愛してをられた。なほシェークスピヤの作中には、格言のやうな、人の心を打つものがあると屢々講述されたが、これは其の一である。(六)と對照して相通ずるものがある。

○印章

「壺中徜徉」

坪内逍遙の音を通はせたのだが、（七）で述べたやうな意もある。

一六

◎我爲我。自我作古。

我れは能く我が正しとし是なりと信ずる所を行ひ、決して古へに拘泥せず、自分で自分といふものを作り上げ、而して我れより創世的のものを作り出すの意。（出典は宋史）

○印章

「壺中徜徉」

「柹叟」

一七

◎一超直入如來地。

一たび悟りを開いて、あらゆる煩惱を解脱すれば、直ちに眞理の彼岸に到達するの意。（出典は明心寶鑑、魯の共公の語）

○印章

「逍遙」

一八

◎案山子の圖

◎クエヒコはしよつちう、野天に立つて、どんな事でも知つてゐます。

◎案山子の鼻祖久延毘古。

博士作の兒童劇『すくなびこな』に現はれるクエヒコといふ案山子を描き、其の一節を賛したもの。やはり哲學的な暗示を持つ句である。

○印章

「柹叟」

一九

◎與物爲春。

萬物と我れとは元來一如で、渾然融合してゐるのである。自他を別たないから、我が心は陽陽として春の如くなごやかなる境地に到るをいふ。（出典は莊子德充符）

○印章

「無礙」

「逍遙一世」

二〇

◎天地一指

昭和歳在

癸酉春四月

逍遙人

天地も一指也、萬物も一馬也と對句をなす。我れの指と汝の指とを區別してはいけない。馬は白馬をのみ馬となし、白馬ならざれば馬となさざるが如き、狹量な差別的概念に束縛されてはいけない。我れも汝も天地の間にある一様の存在であり、白馬も白馬ならざるも馬たることに變りはない。天地の間、自他彼此を別つ勿れの意である。（出典は莊子齊物篇）

○印章

「意長日月促」

「柹叟」

二二

◎櫻樹落花の圖。

◎癸酉四月雨連日、あたら花の盛りを、われは風を引きて、終日褥中に在り。雨に風花の五日をさゝはうさ。

○印章

「逍遥」

二三

◎不自矜故長。

自己の功力に矜らないものが、學問藝道に長足の進歩を見るの意。（出典は老子）

○印章

「融會無礙」

「逍遥遊人」

二三

◎吾みづから人にならはで作るてふ、此すさみなくばわれ生けらむや。

博士は他の模倣をすることを極度に嫌はれた。「すさみ」は演劇のことを指してもゐるが、藝術全般をも指してゐる。

○印章

「逍遥書屋」

「壺中」

二四

◎天地間一大戲場

（次條參看）

二五

◎古今來許多脚色

（前條參看）

倜庵筆記に「日月燈、江海油、雷霆鼓板、天地一大戲場、堯舜旦、文武末、莽操丑淨、古今來許多脚色、此淸康熙帝語、嘗以揭于坐側也、聞者莫不想慕其英風、然楊用修已云、天地乃一大戲場、堯舜爲古今大淨、千載而下不得其解、皆矮人觀場也、語氣極相類、坤齋日抄宋毛珝詩、聞世今知百戲場、錢宗伯又云、乾坤百戲場、康熙御製語本于此」とある。要するに天地の間に介在する此の社會は、觀じ來れば大きな劇場のやうなものだといふの意。博士が早稻田大學演劇博物館の成るに際して其の正面の軒に、"Totus Mundus Agit Histrionem"（全世界は劇場なり）といふラテン語を刻せしめられたのも同じ意であつた。

二六

◎持盈守成

十分なりとするものを堅く持し、完成せしとするものを守る。（出典は宋史）

二七

◎渉レ遐必自レ邇（とほきをわたるにかならずちかきよりす）

はるかなる遠地に行かうとするには、必ず足もとの第一歩よりする。着實正確、努力修養を說き、飛躍的空想、冒險を排したるの句。（出典は中庸）

二八

◎終日乾々夕惕若厲无咎（しゆうじつけんけんゆふべにてきじやくたりあやふけれどもとがなし）

乾々は健々に同じく、勉めて止まざること。惕若は恐懼の貌、反省回顧である。厲は多難な場合をいふ。來る日も來る日も絕えず努力し、其の終りに反省、戒心すれば、いかなる難局に處しても咎なく、間違ひなく過ぎ得るの意。（出典は易經）

○印章

「不即不離」
「雙柹叟」
「逍遙」

昭和十一年二月二十八日納本
昭和十一年三月十五日發賣

坪內逍遙博士遺墨 任興帖（任興帖解說附）

參百部限定出版 價拾圓
內 非賣八拾部

著作權者 早稻田大學坪內博士記念演劇博物館內 財團法人 國劇向上會
代表者 長谷川誠也
東京市麴町區三番町一

刊行者 長谷川巳之吉
東京市麴町區三番町一

刊行所 第一書房